

第2回 川崎市総合教育会議 会議録

日 時：令和2年3月22日 月曜日 15時00分～16時40分

場 所：川崎市役所第3庁舎18階 講堂

出席者：

福田 紀彦 市長
小田嶋 満 教育長
岡田 弘 教育長職務代理人
高橋 美里 委員
岩切 貴乃 委員
石井 孝 委員
田中 雅文 委員

理事者

○総務企画局

大澤総務企画局長

○教育委員会事務局

石井教育次長

亀川担当理事 総務部長事務取扱

田中教育政策室長

森学校教育部長

市川総合教育センター所長

細見指導課長

猫橋指導課担当課長

伊藤指導課担当課長

栃木総合教育センター情報・視聴覚センター室長

辰口総合教育センターカリキュラムセンター室長

二瓶教育政策室担当課長

葛山教育政策室担当係長

事務局

宮崎総務企画局都市政策部長

山井総務企画局都市政策部企画調整課担当課長 [企画調整]

瀬川総務企画局都市政策部企画調整課担当課長 [企画調整]

亀村総務企画局都市政策部企画調整課担当係長 [企画調整]

傍聴者数：0人

報道関係：1社

※ 読みやすさ等のため、文意を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

15時00分 開会

宮崎総務企画局都市政策部長 それでは、定刻になりましたので、令和2年度第2回川崎市総合教育会議を開会させていただきます。

初めに、福田市長から御挨拶をお願いいたします。

福田市長 7か月ぶりの総合教育会議ということで、総合教育会議としては田中委員が初めての御参加ということで、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

毎度心がけているつもりですけれども、皆さんから本当に多様な御意見をいただきながら、協議・調整を進めていきたいというふうに思います。

また、今回、コロナの影響というのは、社会全般にわたって大きな影響を受けているわけですが、当然、教育環境においても影響は甚大というか、広範囲にわたっておりますし、そういったところに、厳しい時こそ前向きなチャレンジをしていかななくてはいけないなというところと、やや、今まで困難だと思っていたところがさらに困難というか、厳しいところがさらにこのコロナによってあぶり出されたというところもあるかと思ひます。

そういったところにしっかりと、目を、光を当てていくことというのも大切なことでもありますので、それぞれの経験、識見に基づいた御発言をいただき、今日の総合教育会議も、さらに子どもたちにとっていいものに、施策に資するような、そういった協議・調整をしていきたいというふうに思っておりますので、どうかよろしくお願ひ申し上げます。

以上です。

宮崎総務企画局都市政策部長 ありがとうございます。

これからの進行でございますが、総合教育会議につきましては、地方公共団体の長であります市長が招集・主宰することになっておりますので、福田市長、よろしくお願ひいたします。

福田市長 それでは、本日、二つの議題について、議論をしていきたいと思ひます。

一つ目の議論は、コロナ禍における学校教育についてであります。

この議題については、前回は議論いたしましたけれども、今回は、学校再開後の状況を共有するとともに、コロナの影響が長期化することで懸念される課題等について意見交換したいと思ひます。

それでは、事務局から説明をお願いします。

二瓶教育政策室担当課長 それでは、資料1を御覧ください。画面にも、スライドを映してございます。コロナ禍における学校教育について、御説明いたします。

初めに、課題に対する進捗状況について、説明いたします。

こちらは、昨年8月5日に開催いたしました総合教育会議でお示した、コロナ禍における課題をまとめたものでございます。資料の下欄になりますが、学校教育であれば、家庭とのコミュニケーションと学習保障における課題、社会教育については、サービス提供における課題を会議の中で取り上げましたので、まず初めに、それぞれの課題に対する進捗状況について、説明をいたします。

学校教育についてですが、学校ホームページのCMS化と、アンケート機能つきメール配信システムについては、4月から運用を開始する予定でございます。また、スマートフォンの配備や、欠席連絡のオンライン化については、既に導入済みでございます。

学習保障、教育機会の確保につきましては、教育委員会及び学校現場でオンライン学習ができるよう準備

を進め、体制を整えてきたところでございます。

続いて、社会教育についてでございます。図書館におきましては、図書の宅配サービスを本年4月から試行で開始する予定でございます。また、電子書籍につきましては、図書館システムの改修に合わせて導入を検討する予定でございます。

市民館につきましては、オンライン講座を、各市民館や市民アカデミーにおいて実施をしているところでございます。

次に、コロナ禍で見えてきたことについて、説明いたします。臨時休業期間中には、児童・生徒や家庭から様々な不安の声が寄せられました。これまで当たり前のように通っていた学校に通えない状況が続き、学校が大きな存在であったことをコロナによって改めて認識させられたところでございます。

続きまして、学校の役割についてでございます。学習面だけではなく、多面的な役割が学校にはあり、特に、学習面以外の、安全・安心につながる居場所であるとか、心身の健康を保障する、福祉的な役割であるといったことは、コロナを機に、再認識させられたところでございます。各学校におきましては、学校再開後は、感染症対策を十分に講じた上で、工夫をしながら、教育活動を行ってまいりました。

次に、取組状況でございます。ここからは、学校での感染症対策や、教育活動の様子を紹介してまいります。まずは、お手元の資料でスライドの10ページになります。3番、取組状況でございます。こちら、ここからは、学校での感染症対策や、教育活動の様子を紹介してまいります。まずは、登校時の様子です。

次のスライドに移りまして、学校内での注意喚起の掲示などの様子でございます。

次に、こちらは、タブレット等を、ICTを活用いたしまして、授業を工夫して実施している事例でございます。

次に、こちらは体育や音楽の授業で、ソーシャルディスタンスに配慮しながら活動している様子でございます。

次に、こちらは給食の準備や喫食の様子を写したものでございます。

最後に、放課後に実施している、児童・生徒がよく手を触れる箇所を中心に、消毒を実施している様子でございます。

続きまして、心のケアについてでございます。臨時休業期間中は、学校におきまして、児童生徒の心身の健康状況の把握を行ってまいりました。また、学校再開後は、子どもの様子を丁寧に確認して、不安の解消に努めてまいりました。多くの子どもたちは、コロナの影響を受けつつも、たくましく過ごしている一方で、子どもたちを取り巻く環境が変化しており、コロナへの不安から登校を見合わせている児童・生徒や、漠然とした不安感やストレスを抱えている子どもたちへの対応が求められております。

次に、コロナ禍が長期化していることでの影響について、御説明いたします。コロナが長期化していることでの影響につきましては、学校運営における制限と、子どもを取り巻く環境の変化によるストレスに分けられます。

まず、学校運営における制限についてでございますが、主なものとして、学習、学校行事、部活動において、それぞれ制限された中で、工夫しながら活動を行っております。

次に、子どもを取り巻く環境の変化によるストレスにつきましては、漠然とした不安感やストレス、また、家庭環境の変化によるストレスなどがあり、大人がストレスを抱えることによって、子どもは敏感に察知し、子どももストレスを抱えてしまうケースがあるものと思われまます。

次に、児童・生徒の状況の変化について、確認していきたいと思っております。まず、児童・生徒の登校状況については、コロナへの不安から、登校を見合わせている児童・生徒の人数をまとめたものになります。1月に急激に増加しているこちらの要因といたしましては、入学試験を控え、登校を見合わせているケースによるものと捉えております。ちなみに、この小学校1,042名のうち、およそ700人ほどは受験を控えているというふうにカウントしてございます。

次に、不登校児童生徒数についてでございます。令和2年度の数値は、調査対象期間が6月から11月までであることを踏まえ、最終的には昨年度の数字と同程度になるものと予測しております。

こちらは、就学援助の過去3年の推移になります。認定者数は、おおむね横ばいですが、この点につきましては、コロナの影響は今後増加するものと思われ、来年度以降の推移も注視していく必要があるものと考えております。なお、資料下段にございますように、令和2年度、家計急変による申請が167件、そのうち認定が99件となっております。

こちらは、相談内容について、学校や教育委員会に寄せられたものをまとめたものになります。吹き出しにありますように、同居の家族に高齢者がいて感染させたくないであるとか、修学旅行に行きたいけど感染が心配。それから、学校に行けないから学校での子どもの様子が分からない。これは授業参観日等が制限されることによって、子どもの様子が分からないという御意見でございます。また、就学援助では、職を失ったから経済的な援助を受けたい。こういった子どもや保護者の声が寄せられたものでございます。

最後に、まとめになりますが、現状のデータだけでは、子どもたちのコロナによる影響について、現時点では正確に把握できないこと、また、中長期的には、数値としてデータに反映され、課題として表面化する可能性もございますので、今後も継続して状況把握を行い、適切な支援につなげてまいります。

そして、今後の対応についてでございますが、刻々と変化する一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を行う必要があることや、児童・生徒の様子を複数の教職員で情報共有し、協働して指導や支援に当たる必要があることから、主な対応といたしまして、下段にありますとおり、子どもへの見守り、状況把握、学校への支援、また、区役所等関係機関との連携した対応というのを、主な内容として、挙げさせていただいております。

今後も、こうした取組、対応を行いながら、適切に状況把握に努め、特に、子どもたちの心のケアについては、丁寧に対応してまいります。

説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

それでは、コロナ禍における学校の役割や、子どもの心のケア等について、意見交換してまいりたいと思います。

どなたからでも結構ですので、また、この資料に沿ってではなくても結構ですから、ぜひ御意見いただければと思います。

石井委員、お願いします。

石井委員 御説明ありがとうございました。

説明の冒頭の、学校教育の中で、保護者の方に対して、迅速に丁寧に対応していくということが非常に大切なことで、学校への信頼感の醸成につながると思います。

先ほど、家庭とのコミュニケーションの中で、ホームページのCMS化の説明がありましたけれども、これはぜひ進めていただきたいというふうに思っております。

また、アンケートつきのメールの配信の取組なんかも、非常にいいと思います。ウェビナーで、今では、アンケート調査も種々同時に行われていまして、結果の配信も参加者にかなり早いタイミングで共有されますので、ほかの参加者の意見であるとか、いろいろな保護者の意見等も瞬時に理解できますし、全体もつかみやすくなってきているというふうに思っておりますので、こういった取組は非常に大切なことだと思います。

また、校長先生の顔が見える取組、情報発信というのも非常に大切だと思っております。ですから、学校内の様子などで、いろいろな素材があると思いますので、そういったものに校長先生も興味を持って、学校の中の様子をぜひ外部にも発信をして、学校の中のことが地域や保護者、いろいろな人に理解できるよ

うな取組というのは、非常に大切なことだと思いますので、ぜひ推進していただきたいというふうに思います。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

高橋委員、お願いします。

高橋委員 今の石井委員のお話に関連しまして、資料のほうのスライド23のところにも、学校に行けないから学校での子どもの様子が分からないというお話。ちょうど3月にいろいろ学校の行事が、子どもの発表会ですとか、学校の報告会等あって、学校に行った時も、やっぱり授業参観なんか全然なくて、学校に本当に来ていないから学校のことが分からないっておっしゃっていた方が何人もいらっしゃって、私の子どもが行っている学校では、幸いにもホームページに夏過ぎから学校の教育活動の様子ですとか、子どもたちの様子を教頭先生が上げてくださって、それがすごく役に立ったと言いますか、子どもも、そんなに親に報告してくれない御家庭もあるので、それが本当に私も安心しましたし、いろんな方からも安心するねというお話は聞いたので、このCMS化していただいて、先生方の負担を増やすことなく、学校の情報を保護者なりに、また、御協力いただいている地域の方に発信していくというのは、すごく大事なことになるかなというふうに思いました。

福田市長 ありがとうございます。

田中委員 ちょっとよろしいでしょうか。

今の高橋委員の御発言ではと思ったのですが、やっぱり授業参観も行けないという、親から見ると、お子さんたちが学校でどう過ごしているか分からないという、そういうことを考えると、もうやっぴらっしゃるのかもしれませんが、例えば、インターネットで配信してしまうと、いろいろ個人情報の問題とか発生するので、限定的に校内だけということ、教室での授業の様子をリアルタイムで体育館辺りにスクリーンに映して、親御さんがそれを見て、こういう授業、やっているんだなというのを見られるとよいのではないのでしょうか。体育館であれば、保護者のほうもあまり密にならなくて、分散して座れるし、それを例えば、何学年の何組は何日とか、順番にやっていくと、親としてもある程度、学校での授業の様子が分かるので、そういうこともありかなという気がしました。

もうやっぴらっしゃるなら、とてもすばらしいことだと思います。

もう一つ、今のところ、関連して思いついたのは、特に1年生辺りだと、入学してからまだ友達の素顔も見ないまま学校で過ごしているということもあろうかと思うんですね。登下校なんかのときは、結構、子どもたちはマスクを取って、友達同士で歩いたりしているので、仲よし同士はもう分かっているのかもしれませんが、クラス全体がなかなか、まだあの子はどんな顔というのも分からない可能性もあるかなと思います。そうであれば、次のGIGAスクールと絡んでくるんですけど、時々、川崎であればGoogleだから、Google Meetかな。Zoomみたいなもので、各家庭から子どもたちが参加して、それは堂々とマスク取れるので、クラスの友達同士が画面越しでちゃんと顔が見えて、あの子、あんな顔しているんだという、そこで素顔が全部分かる。そうすると、学校で出会っても、あの子こんな顔だということで理解しながら接せられるので、素顔が画面越しでもいいから、時々見られるようなことを試みていってもいいのかなという気がします。

私も大学ですけれども、キャンパスで学生に会ったらマスクしているので顔が分からないのですが、今、学生と最も密に会えるのがZoomで、Zoomで出会うとみんな素顔で出てくるので、こういう顔、こう

いう顔ってよく分かるんですね。表情もよく分かって。むしろ、だから、Zoomのほうがコミュニケーションがしやすいという面もあったりするぐらいですので、子どもたちも素顔で友達と出会える機会を、オンラインを通して、できるだけつくっていくということもありかなという気がしました。

すみません、長くて。もう1点だけ、まとめて言ってしまうです。

学校教育の課題がきょうのテーマですけれども、ただ、子どもたちは人格的にも生活的にもトータルな一つですので、学校と家庭ともう一つ、やはり社会、地域ということがとても大事で、いろいろ鬱積しやすいものとか、難しい問題を抱えている場合、やはり地域の大人がこれを聞いてあげるとか、地域の大人と接することで癒やされるとか、そういうことは経験的に随分あると思うんですね。

川崎であれば、わくわくプラザであったり、寺子屋事業であったり、それから地域教育会議とか、施設で言えば、こども文化センターもありますし。こういったものが、今こそ、学校と連携しながら、特に難しくなりやすいような子どもの居場所的な機能を、社会、地域の側で持っていく。言わば、社会教育の分野に入ってくると思いますけど、やはりその辺の、学校教育と社会教育の連携の中で、子どもを誰一人取りこぼさず支えていくというような体制を明確につくっていくといいなと思いました。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

お願いします。

岩切委員 御説明のほう、ありがとうございました。

今月の話ですけれども、3月の9日から11日の修学旅行に代えての「かわさき子どもプロジェクト」、よみうりランドの貸切り、本当にありがとうございました。あのお話を友人たち、いろんなところにちょっと発信したのですけれども、川崎やるねというふうなうれしいコメントを結構いただきまして、やっぱりこの1年間、本当に子どもたちが何もできない、イベントが中止している、それから、夏休みも2週間ぐらいしかないというような、そんな中で、本当に最後の6年生の終わりの時に、みんなと一生懸命、本当に、とにかくはじけるような笑顔で行ったというのがすごく印象的でした。ああいうことを本当に川崎が先陣を切ってやったというのが、本当にすごくいいことだったなというふうに思っています。

やはり、私たち、教育委員会のほうにとっても、実は本当、スクールミーティングもなく、子どもたちの、本当に、実際の笑顔に接する機会というのが本当に乏しかった1年間だったのですけれども、やっぱり、子どもたちの実際の現場というのを見ないと、なかなかいろんなものが分かってこないなということをちょっと感じました。

生徒・児童にとっても、このコロナの1年というのは、初めての体験で、いろんな不安とか戸惑いもあったでしょうし、それから親御さんの心配とか不安といったものも、多分物すごく、私たちが思っている以上に敏感に感じているのではないかと思うのですね。親御さんによっては、家族の体調の悪い方とか、いろんな問題を抱えていらっしゃる方、あるいは経済的な問題に直面している家庭なんていうと、やはりそういったことを自分のところで止めてしまって、そういったその心配を増幅している子どもたちがいっぱいいるのではないかということがちょっと容易に想像できます。

特に、いろんなホワイトカラーの家庭ですと、かなり在宅が進みましましたので、子どもたちが休まなければいけないときにも家にいることができるという家庭は結構あったのですけれど、例えば、医療従事者であったりとか、あるいは飲食店関係であったり、スーパーとか、ああいった、本当にデイリーでずっと出なければいけないようなところ、あるいは社会インフラ系のところに勤めている親御さんというふうになりますと、子どもが一人になる可能性というのもすごく多かった1年だと思うのです。その子どもたちのケアもぜひ、本当にお願ひしていきなというふうに思っています。

そして、それと同時に、やはり現場の先生方にとっても、このコロナの1年というのは、先生にとっても初めての経験だったというのは本当に間違いのないところで、研修会の報告をいただいたときに、先生方の苦労とか工夫もいろいろお伺いしたのですけれど、やはりすごい大変だったというのを感じ取れた部分がありまして、現場の先生方のケアもぜひお願いしたいなというふうに思っています。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

岡田委員、お願いします。

岡田委員 現状は、未経験の状態を私たちが経験して、今のこの川崎の教育の現状があるんだというふうに思うんですね。手前みそではなくて、マイベストを尽くしていると私は思っていて、いいなというふうに思っています。

これは、やっぱりガバナンスの問題で、やっぱりしっかりとガバナンスがなければ、これは実現していかないだろうなというふうに思っていますので、市長、教育長が先頭に立っていただいて、それが校長のところに伝わって行って、そのガバナンスがきちんとしていることがなければ、この状態はないだろうなというふうに思っています。

と同時に、現場の管理職の校長先生を中心にして、教職員の献身的な教育活動、これがやっぱりあってこそじゃないかなというふうに思っています。

コロナ以前と比べるだけではなくて、これからのコロナの状況を考えると、過去の歴史は全て新しく変わっていきますので、その変化というところにやっぱり目を向けていきたいなというふうに思います。当然、新しい生活様式に代表されるようなデジタルトランスフォーメーションが加速しましたよね。それから、ソーシャルディスタンスとか、学校現場でいくと黙食とか、マスクを通した対人関係の在り方というような、新しい人間関係というのがつくられていくべきなんだろうというふうに思うのです。

と同時に、私たち、または地域社会は、学校がいかに精神的な支柱かというのを確認したのではないかと思うのです。学校の登校が始まった時の、子どもたちの登校風景を見て、どれだけ地域住民が力をもったか。または、校庭で、従来のような大声は出さないのですけれども、体育の授業をやっているその姿を見て、ああ、私たちも頑張らなきゃという思い、そういうものを強くしたのではないかなというふうに思います。

つまり、もう一度申し上げますけれども、地域社会の精神的な支柱に学校教育がなっているということ、だから、精神的な安定とか、生きる力のアップとか、そういったものに学校教育が大きく寄与しているなというのを、私は実感したところであります。

先ほど言いましたように、新しく生まれてくるものとして、私は心理学を専門にしていますので、フラストレーション・トレランスという、欲求不満に耐える力が確実に上がっているというふうに思います。それから、ストレス・マネジメントの意識が、地域住民をはじめ、先生方、それから子どもたちも上がっているのではないかとというふうに思います。それは、例えば、家庭内での身体接触がいかに自分たちを癒やすとか、泣きたいときに泣いていいのだとか、涙を流すことで浄化が起こるとか、それから、ネガティブ・ケイパビリティ、答えのない事態に耐える力が向上している。それから、先日の教育委員会会議で出たのですが、実は、川崎の中学生の読書量が増えているという報告があって、これもすばらしいことだなというふうに思いました。

そこで、私の中で、キーワードとして出てきたのが、つながるということ、それから共有すること、共感すること、信頼、思いやり。この中で、やはり特にこの、つながるということがとても大切なんじゃないかなというふうに思いました。

実は、これは私の私見なのですが、日本人は自己意識が非常に強いと思っています。だから、人と違った

ことをしたいという心があったり、それは創造性の源になっているのではないかなというふうに思います。そうすると、そういったところを見ながら、これからの教育をどうしていくかというスタートに立ったのではないかなと思うのです。

一例ですけど、神奈川県がマイME－BYOカルテってやっていますよね、たしか。あれにイギリスのBabylon Health、AIを使った診断の方法がありますから、そんなものを組み合わせて、川崎版の新しい何かできないかなとか、これまでにないものがないかなとか。

それは、だから、ウィズコロナとか、アフターコロナを意識したところのe-ポートフォリオとか、川崎が進めています、キャリア在り方生き方教育なんかも、キャリア・パスポート、これをeキャリア・パスポートの形で、何かできないかなというふうに思っています。

それから、先ほど申し上げた、新しい人間関係をつくっていくというふうなときに、居場所というのは、人との関係の中にこそあるんだというのは、このコロナで皆さん確認したのではないかなと思うのです。言い方を変えると、安心できる人とのつながりを増やすことでしか、つまりその中でしか、その人との中でしか、自分の心の居場所というのではないということを考えて、川崎市が進めている共生＊教育プログラムのフェーズアップ、新しい教育理念に合わせた新しいものをつくり出すことが大切じゃないかなと。

一例でいけば、SNS上での人間関係づくりとか、マスクを通した人間関係づくりとか、あるいはSOSの出し方とか、DXでの人間関係づくりとか。つまり、もっと具体的に言ってしまうと、非言語コミュニケーションをどういうふうに、スキルをどう教えるかとか、コンフロンテーション、対時のスキルをどう教えるかとか、セルフ・アサーション・スキル、自己主張のスキルをどう教えるかとか、あるいはパブリック・スピーキングのスキルをどう教えるかというようなことも、これから工夫していく必要があるのではないかなと。

先ほど申し上げたように、心理の立場からすると、こういう全国的な困難な状況というか、苦しい状況を経験したとき、実は、その年、その次の年、その次の次の年、つまり3年後ぐらいまではみんな頑張っているのですよ。4年目か5年目辺りに、PTSDであったりだとか、トラウマであったりとかというようなものが出てきて、不登校がさらに増えていったりとか、そういうことがありますので、国も、実は予防開発の生徒指導に方向性を変えていくことが伺え始めているのですね。そうすると、川崎の生徒指導であったり、そういったものが、予防教育に視点を当てていく方向性を示すのが、一案ではないかなというふうに思いました。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

教育長、よろしいですか。

小田嶋教育長 学校は、この3月までの状況がどうだったかということで、実は幾つかの学校をちょっと訪ねて、校長と話を聞いて、子どもたちの様子や教員の様子を少し聞いてきました。その中で、先ほど高橋委員、田中委員からあった、授業参観のことで、全体的に各学校、本当にいろいろな工夫をしながら取組をいろいろやっている中で、GIGAスクールの先進校、モデル校としてやっている学校なのですが、授業参観の様子を配信したり、あるいはYouTubeで配信したというふうな取組もありました。あと、これは別に先進校ではないのですが、そういうことに意欲的な教員が、不登校の子をオンラインで学級会に参加させたという事例を聞いて、本当に様々な工夫をしているのだなということを知りました。

それで、私、前回の8月の時に、中期的な心配として、中学校の校長がこういうことを心配しているということで、本来でしたら、上級学年として期待されているリーダーシップを発揮する場面などが非常に減ることで、それを見て育つ下級生への影響ということが中期的に出てくるのではないかな、そういうことを校長

が心配しているというような発言をしましたが、そういう面で子どもたちどうでしたかというのを中学校2校にちょっと聞いてきましたが、学校は本当に様々な工夫をして、子どもたちが活躍できる場面というのをつくっていました。

例えば、体育祭なのですが、制限の中でどうやるか、何ができるかということ、教員も生徒も前向きに捉えながら考えて、よく話し合うと。よく話し合う中で、コミュニケーションを深めて、そして、実際にそれが出来上がったというところで、やっぱりできてよかったという満足感が非常に強かったということで。そういう活動を通してながら、感染予防意識も高まっていったそうです。内容的には縮小しているのですが、子どもたちからはつまらないなんていう声は全然なかったということでした。

あと、もう一つの学校では、どこの学校も、中学校の体育祭、応援というのが大変大きな比重を占めているわけですが、例年メインの取組としているのですが、今年は、声を出すのは団長のみと。それ以外は、手拍子を工夫する、あるいは動きを工夫するという制限の中で、過去のいろいろな応援の取組ってあると思うのですが、過去の踏襲ではなくて、このような状況だからこそ、一度立ち止まって、みんなで考えて工夫してできる形を考えた。そして、例年以上にその一体感がすばらしかったということで、校長は感動して満点をつけたいというようなことで言っていました。そういう中で、上級生も下級生も感じたり学んだりしたことは大変大きかったということで、やっぱりこんな状況の中だからこそ、また、体験できることもあったのだな。

そして、修学旅行のことで、校長が修学旅行を実施したということで、感謝の手紙ということで、卒業式の前日に、ある生徒が校長先生に手紙を持ってきて、その手紙の中に、こんな時代だからこそ、かわいそうだとよく大人から言われたのだけど、周囲から言われたのだけど、私はそんなことはなかったと。こんな時代だからこそ、分かったこと、考えたことがたくさんあった。とても充実した1年間だったと、そういう手紙をもらって、校長も非常に感動して、子どもたちは、やはりこういう中でも前向きに捉えているのだということが非常に分かって、私もそれを聞いてとても嬉しかったというのがありました。

今までの、何となくとは言いませんけれど、やっぱり当たり前のようにやってきた様々な行事ですとか活動を、見直す中で、やっぱり本来何のためにやっているのか、目指している目標は何なのかということをもう一度しっかり改めて考えて、その目的達成の中で制限の中でどうやるのか、できることは何なのか、そういう形で、多分、小学校においても、中学校においても、取り組んでくれたのかなと思います。

ただ、そういう中でも、先ほど、岡田委員も言われたように、子どもたちの内面がすぐに出てくるのか、今後出てくるのか、という心配がある中で、学校のほうでは定期的な面談を、だいたい年に2回やっているほか、随時にやっていて、二～三回は面談や教育相談を実施しているわけですが、特に際立った問題というのが生じているという報告はないです。

しかし、このコロナのことに限らず、子どもたちは誰でもやっぱり、いじめですとか、友人関係とか、学習、家庭での悩み、そういったものが当然、悩みや困り感というのがあるはずですので、それをしっかりキャッチしていくという上で、実は、このコロナのことではないのですが、昨年11月に、いじめの早期発見のためにということで手引きを新たにつくりました。こういう手引き、リーフレットなのですが、そこで掲げたキャッチフレーズとして、ちょっと今までにないもので、今までアンテナでストレスをキャッチする。そのアンテナでキャッチから、ソナーで探知へ、というふうなフレーズに変えました。ソナーで探知へと。

このことはとても大事なことで、アンテナを感度を上げることはもちろん大事なのですが、どんな集団でも、誰でも、必ず内面的な悩みや困り感を抱えているはずだと。そういう意識転換の中で、どうしてもキャッチというと受け身のイメージがあるのですが、それを積極的にソナーで探知、探しにいくんだという意識で行かないと、見つけられないということですね。このことを、私も校長研修の折に出かけて行って、全校長に話をしました。これは、やっぱり、このコロナ禍の子どもたちの内面を支える意味でも、そういった視点というのは非常に大事なのではないかなと思って、今後また来年度に向けても、しっかりその辺のどこ

ろを強調していきたいなと思っています。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

ありがとうございました。今一通り一巡したのですけれども、一巡した後で、あの方の意見のことについて何かコメントしたいとか、付け足すことあるという方、いらっしゃいましたら、どうぞ。

高橋委員。

高橋委員 今の教育長の、ソナーで探知、探しに行くというところは、本当にありがたいと思いますし、私も含め、先生方だけではなくて、保護者もそういうふうにはやっていかなければいけないというふうに思っていて、私自身、この1年でこういうコロナでいろいろ制限している状況に慣れてしまって、子どもの様子とかを捉える感覚が鈍っているなというところは、最近すごく感じる事が多くて。

恐らく、学校でも、やっぱりマスクをしていると、子どものちょっとした表情とか、先生たち、すごく、察知するのが難しくなってきたのではないかなというふうに思っていて、もちろん、親もそういうところがあるなと思っていて。

子どもも、世の中の雰囲気が我慢するという雰囲気なので、自分の思っていることとかを、もしかしたら発信しづらい世の中になっているのかなというところも。困っていることとか、不満とかを言いづらいという意味で。

なので、先生方ももちろん、保護者もそうですけれど、大丈夫かなと待っているのではなくて、積極的に見ていくということはすごく改めて大事だなと思ったので、ぜひみんなで進めていけたらいいなというふうに思いました。

福田市長 ありがとうございます。

ほか、よろしいですか。

(なし)

福田市長 いろんなキーワード、出てきたと思います。特にまとめるわけではありませんけれども、本当に、教育長の話にありましたけれども、通年やっていたことがことごとく制限を受ける中で、改めて、目的って何だったかなというふうなのを見直して、その目的に合致しているものというのは一体何なのかという、再度問い直す大きなきっかけになっているというふうなの、これ、間違いないと思いますし、今後、どうやってよりいいものに、というふうに転換するチャンスだと思っています。

この厳しい状況だからこそ、やはり、親たち、大人たちの姿勢というふうなもの、子どもたちに対する影響って物すごく大きいと思うので、先ほどの、ストレスも子どもに伝わりやすいですし、悩みだとか迷いだとかというふうな、あるいは自信のなさだとかというふうなものというのは、どんどん子どもたちに吸収されていくという意味では、大人たちがまず、目的何だろう、それについて前向いてやろうというふうな、そういうことってすごく必要ななと思います。

ですから、いい話というのをどんどん引き上げていかなければいけないというふうなのは、あえて、思っております。そういった意味で、高橋委員あるいは石井委員や、ほかの方からもありましたけれども、情報発信という意味では、いろいろ学校なりに工夫していただいている部分はあると思うのですが、今日、午前中に市民文化大使の一部の方たちとZoomで会議をやったんですね。今、文化芸術分野は非常に厳しいときにあって、皆さんどう思っておられるのか、どういうふうな、逆に厳しいけど前向いてやられるとい

うのかというのを意見交換していく中で、ピアニストの方なんかは、動画で配信して、実はピアニストの手元なんていうふうなのをコンサートでは見るができなかったと。だけど、あえて手元を映してみた。そうすると、興味のある人たちがすごいうわあっと入ってきているというので、こんなことでも起きなければ、そんなこと、見せようとも思わなかったという話なんです。あえて今まで見えていなかったことを見せていくというふうな、学校の現場は、保護者をはじめ、多くのステークホルダーの人たちに見せていくということはとても大事なのではないかと思います。

違う事例でありますけど、学校にとっても同じこと言えるのではないかなと。親も、分かっているようで分かっていないこと、あるいは、こういうことを親御さんに理解してもらえるとありがたいのだけどもと学校側が思っていること、教育委員会が思っていることというのを、もっと違う形で発信していく。動画の工夫ありましたけど、あるいはちょっとそこは動画では難しいという形であれば、写真だとか、ちょっとメッセージみたいなことで加工したりなんかして、そんな形で、広く知ってもらうことによるポジティブな効果というのが、僕は生まれるのではないかなというふうに思っています。

ちょっと長くなってあれですけど、昨日、私、区民車座集会をやって、幸区だったのですけれども、ボール遊びをできる公園をどうやって造っていくか、公園というか場所をどうつくっていくかという議論を、小学生たちを交えてやったのですけれども、1年間半ぐらい議論をしていて、地域の人たちもすごく深く関わっていただいているのです。その時に、新たな提案として、昨日は高校生二人が参加したんです。川崎市幸区にある高校がですね。その生徒さん二人がある提案を持ってきて、自分たちも自分たちなりに子どもたちにアンケートを取ってみた。そうすると、高校生と遊びたいと思っている人が実は7割もいると、小学生の中で。僕も含めて、大人たち、その言葉に衝撃を受けて、小学生が高校生と遊びたいですかと。感覚的に僕ちょっと分からなかった部分があったんですけど、実はどういうことなんだろうとかいうふうな話を、後でいろいろ聞いていましたら、例えば、今、公園にいろんな年代の子たちが増えているけれども、高校生なんか、例えばサッカーの練習をやっているところに、小学生が少し混ぜてもらっていると。中学生だとちょっと近過ぎるので、思春期に当たってちょっと照れなんかいろいろあったりだけど、高校生だと実は受け入れていると。

そういうロールモデルみたいな人たちが、地域の中でいろんなことをやっているというのも見えているのかもしれないという話なのですが、ちょっと私の時代から考えると、小学生の時、高校生と遊ぶかというふうなのがあるんですけど、昨日、13人、小学生が参加してくれていたんで、高校生と遊びたいって聞いたら、遊びたいって12人の子が、一人以外全員は手を挙げるんですよ。遊びたいと。ええって。

実は、その高校生側とすれば、将来保育士を目指したい、学校の先生になりたいとか、そういう人たちからするとすごくいい経験だし、交わりたいと思っている学生さんたちも結構いるというふうな話を聞いて、そこにいる大人たちがものすごくびっくりして、そういうのってどうでしょうかと言ったら、子どもたちはみんなやりたいと言うのですよね。

これって、コロナで見えてきた課題が、実は、違う、今まで想定していなかった人たちというのが加わる可能性が出てきた。その発見の場にも意外となっているんだということに、先ほど、田中委員から、やっぱり学校教育、家庭教育、それから地域での社会教育というのはどうやって織り交ぜていくかというふうなところで、今まで市長部局でやっている青少年問題協議会の答申で、若者の社会参加、地域参加ということがずっと議論になっているのですけれども、実はこういう形で加わるというのはあまり想定していなかったことが、高校生のほうから出てきているというのは、すごくいい話だと思っています。

そういったところを巻き込めるような受皿というか、マインドセットというふうなのが、地域にも、学校にも、やっぱり必要なだろうというようなことを、非常に皆様の御意見の中から、今、私、感じさせていただいております。

アンテナでキャッチからソナーで探知という教育長のお言葉も、非常に刺さるというか、本当、そうだな

というふうに思います。

私たちも、このコロナで、市ではいろんな相談窓口を持っているのですが、相談窓口がそれぞれの相談窓口なので、果たして、困り事というのをほかの窓口と共有しているかって、なかなかそこまではいつていないというのを、もう少し重ね合わせたほうがいいのではないかというので何度か会議やっているのですが、やっぱり見えないところ、声なき声のところ話しに聞こえ、聞きに聞こえといっても、なかなか、やはり声なき声は拾えていないというふうなの、私の第一義的な欠陥の部分があるんですね。そういう意味では、さらにアウトリーチしていかなくてはいけないところと、それと、やっぱりNPOをはじめ、いろんな地域で活動している人たち、拾っている、探知している人たち、そういう人たちと、どううまく連携していくかということが、すごく大事な点。

やっぱり、役所の中だけでは限界があるというところに、限界があるからこそ、どこと一緒に組んでいくかというその座組みを考えていくことがすごく大事な、そういう立ち位置をちゃんと持つということが、次なる前向きな展開につながっていくというふうに感じております。

長くなりました。すみません。

次の議題のほうに移らせていただきたいと思います。

それでは、かわさきGIGAスクール構想の取組についてでありますけれども、この間、ICT環境の整備にスピード感を持って取り組んでまいりましたし、今後の取組の方向性について検討を進めていただきました。

それでは、本日、これまでの取組の状況を共有して、今後のあるべき姿とその実現に向けた取組の方向性について、意見交換をしたいと思います。

それでは、事務局から説明を、お願いします。

二瓶教育政策室担当課長 それでは、資料2を御覧ください。

かわさきGIGAスクール構想の取組について、御説明いたします。

初めに、取組の進捗状況でございます。こちらは、かわさきGIGAスクールの主な取組の進捗状況について、まとめたものでございます。1人1台端末の導入を着実に進めたこと、また、教職員向けに研修の実施やハンドブックの作成を行うなど、学校の支援に努めてまいりました。また、学校と教育委員会の間で閲覧できるサイトを開設し、情報共有を行っているところでございます。こうした取組について、保護者等に周知を行っているところでございますが、GIGAスクール構想によって、今後の教育が大きく変わることを理解していただくため、引き続き広報に努めてまいります。

こちらは、教員に実施した、Google for Education の研修の様子になります。こちら、延べにして、約1,000名の教職員が受講をしております。

こちらのスライドは、アプリを使って協働的な学習を実施している授業の様子でございます。先日、旭町小学校の様子を視察したところ、小学校1年生は端末上の漢字がなかなか読めないという部分もありますけれども、先生から漢字の横のボタンを押してくださいと言うと、児童はもう慣れた様子で手際よく対応をしておりました。

情報の共有の様子でございますが、こちらは、Google の Classroom を活用して、教員と教育委員会事務局の職員との間で情報共有を行っているイメージ図になります。過去のやり取りにつきましても、ログが残ることによって確認が容易にでき、情報共有も容易にできるようになっております。

続きまして、かわさきGIGAスクール構想により目指すものについて、御説明いたします。

初めに、社会環境の変化についてでございます。現代社会は、予測困難で不確実性が増す社会であること、また、AIの発達によって、多くの職業がなくなる可能性があるという調査結果がございます。こうした予測困難な社会に生きていく子どもたちに必要な資質、能力とはどのようなものなのか、確認していきたいと

思います。

こちらのスライドは、予測困難な社会に求められる資質・能力でございます。予測困難な社会に求められる資質・能力として、学習指導要領改訂の考え方では以下の3点が示されております。

学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力・人間性等の涵養、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、生きて働く知識・技能の習得の3点でございます。

また、令和3年、本年1月26日に、中央教育審議会の答申でございます。こちらの中では、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするということが必要であると提言しております。

こうした資質・能力を身につけるためにも、下段でございますように、かわさき教育プランやかわさきGIGAスクール構想の取組を推進してまいります。

こちらのスライドは、かわさき教育プランの基本目標になります。自主・自立、共生・協働を基本目標に掲げ、教育施策を推進し、子どもたちの将来に向けた社会的自立に必要な能力や態度を養うことや、培うことや、共生・協働の精神を育てているところでございます。

続きまして、こちらのスライドは、かわさきGIGAスクール構想を通じて実現したい教育の目指す姿でございます。

①といたしまして、ICTを効果的に活用、②といたしまして、児童生徒が主体的な学びにICTを活用、③といたしまして、教員がICTを活用し、授業改善に取り組んでいる、④といたしまして、データを活用し、教育施策に反映する仕組みの構築、以上の4点を、目指す姿、未来像として掲げまして、その実現のために、かわさきGIGAスクール構想の取組によりまして、未来社会の創り手を育ててまいります。

こうした未来像を実現するため、こちらのスライドは、かわさきGIGAスクール構想の取組を進めてまいります。当面の取組の考え方といたしましては、令和3年度より、ステップ0からステップ3まで、段階を踏んで着実に実施してまいります。令和3年度は、まずはできるだけ端末を使ってみることにし、モデルステップで取組を進めてまいります。

未来像を実現するために、今後必要となる新たな視点といたしまして、短期、中期、長期と、時間軸を分けて整理をしております。

こちらのスライドは、短期的な視点としてのツールとしてのICTの活用や人材育成を図るために、主な取組を挙げてございます。この中には、既に実施しているもの、また、令和3年度から実施するものがございますが、今後速やかに実施すべき取組として捉えているところでございます。

主な取組といたしまして、①ICTの環境整備、②共有できるツールの導入、③研修ツールの導入であるとか、④教員の意識・意見、⑤、こちらは、教育活動に集中するためのサポート体制の整備、また、⑥ドリルソフトを活用した個別学習の充実、⑦学習の理解度や進度をリアルタイムで把握、また、教員同士で共有する、⑧学校をサポートする体制の強化、⑨といたしまして、教員の意欲を引き出す柔軟な運用ルールであるとか、⑩といたしまして、学校マネジメントを実践できる管理職の養成とさせていただいております。

次のスライドに移りまして、こちらは、中期的な視点でございます。各学校におけるステップアップや、取組の強化についてでございますが、①といたしまして、ICTのよさを生かした主体的、また協働学習のさらなる充実、②不登校児童生徒への支援の充実、③といたしまして、デジタル教科書等によるもっと分かる授業、④は、ICTを活用した業務の効率化、また⑤といたしまして、学習状況調査の充実等を掲げてございます。

最後に、長期的な視点といたしまして、データの蓄積と活用が必要となってまいります。エビデンスに基づく効果的な教育を実践するためのデータ活用の仕組みを構築することが必要となってくるものと考えております。

このような、短期、中期、長期の取組を進めること、また、社会動向や技術の進歩に的確に対応しながら、公正に個別最適化された学びを実現し、子どもたちの資質・能力の向上を図ってまいります。

説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

それでは、GIGAスクール構想で目指すこれからの川崎の教育や、今後の取組について、御発言、御提案をいただきたいと思えます。

どなたからでも結構です。お願いいたします。

石井委員、お願いいたします。

石井委員 二つありまして、一つ目は予測困難な社会に求められる資質・能力の向上ということで、暮れに研究授業報告会に出席をさせていただいて、そこで分かったことなのですけれども、小学校5年生の授業で、情報通信技術が発展していくと未来がどんな社会になっていくかというテーマでの授業でした。

僕が大変驚いたのは、生徒からは、労働力が減るとか、産業のバランスが崩れるであるとか、窃盗・万引きの犯罪が増えるであるとか、あるいは、お金や昔のものがなくなったり、日本の文化が減少するといった、そういった意見が、次々に出されまして、未来の姿を想像して、それにどんなふうに対処していくかというのをもう小学校5年生なりに考えているという発表を聞いて、非常に驚きました。

そこから分かったのは、いろいろな情報を既に日常的に得ていて、ある程度想像できる力も備わってきているのが事実なのかなというふうに思ったのですね。こうした能力を、子どもたちの能力を引き伸ばして、それで社会の創り手にしていくためには、いろんな情報の取捨選択であるとか、あるいは有効活用であるとか、情報の負の部分などもしっかり教えていく。いわゆるメディアリテラシー教育に十分に力を入れていく必要があるなというふうに感じました。

二つ目としましては、今後必要となる新たな視点ということで言いますと、ICTのよさを生かして、世界と容易につながるができるというのが一つ挙げられると思うのですね。

僕も2月から3月にかけて、いろいろな国とオンラインセミナーであるとか、会議に出席することがありまして、コロナ禍は世界中共通で、そこで、その業務をどんなふうに行っているかとか、日本にはあつて外国にはないとか、その逆であるとか、非常に参考になること、また、日本の知見であるとか、そういった経験も提供できるという、非常にすばらしい機会だったので、ですから、こういった経験を、ぜひ子どものうち、児童・生徒にも経験をして、世界的に貢献できる、そういう川崎の子どもたちが一人でも多く出ていてもらいたいなと思いました。

そのためには、いろんなチャンネルを、多くのチャンネルをつくっていく必要があると思っていて、とりわけ外国とのチャンネルづくりでは、JICAセンターの提供するコンテンツというのは非常に効果的だと思っています。青年海外協力隊派遣事業も、川崎市は非常に積極的で、相当数の人材を派遣していますし、今年も5人今、派遣をしていただいているそうで、残念ながらコロナで今一時帰国しているところなのですけれども、こうした、川崎市市内の人材を有効に使って、例えば、派遣国の学校の児童・生徒とのオンライン交流会であるとか、授業見学であるとか、あるいは日本文化の紹介であるとか、いろいろな共生・協働の学びを充実していく上で非常に大きな場になると思うのですね。ですから、ぜひ横浜にあるJICAセンターとも連携をさせていただいて、学校単位では既に連携も行っているというふうなことも聞いておりますので、ぜひそういったところも積極的に活用していく必要があるのかなと思います。

ICTを活用した新しい部活動、世界につながる部活動なんかを、ぜひ、川崎市の小中学校、高校でつくっていただきたいなと思います。時差の問題とか、いろいろ、言語の問題とかあるのですけれども、ある程度カバーできますし、異文化であるとか、日本の状況とは違うことを経験する、そこを会話することによ

って多様性を享受できたり、いろんな多文化共生のなまの教材になると思いますので、ぜひ、そういったところにも力を入れていただければいいかなというふうに思います。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。

田中委員、お願いします。

田中委員 実は、私は、このG I G Aスクール構想について、心配な点が三つありまして、ただ、心配を前向きに解決していこうとすれば、むしろプラスが高まるという、先ほどのコロナ禍の話で出てきた、ピンチをチャンスに変えるといいますか、そういうふうにつなげていく可能性があるなというふうに思っているものですから、三つほど、簡単に話してみたいと思います。

一つは、よく言われますけれども、このG I G Aスクールが進む中で、いわゆる不利益層的な家庭のお子さんといいますか、貧困世帯であったり、親子の関係がよくなかったりというお子さんの場合、例えば、タブレットを自宅に持って帰るとか、そういうようなことが必要になってきたときにとっても難しい状況に置かれる可能性があると思いますので、ちょっとその辺り、できるだけ学校としてのサポートをうまくやりながら、そういう家庭環境によってさらに格差が拡大するというようなことが起こらないようにできるというふうな思っております。

ただ、同時に、先ほど教育長からも御紹介がありましたように、不登校のお子さんがオンラインで学級会に参加するとか、そういう、むしろG I G Aスクールをそういう不利益な子どもたちにとって前向きに活用できるようなことはいろいろあると思いますので、その辺り、ぜひこのチャンスに、ピンチであって、チャンスであってといいますか、どうしても学校に適應しにくいお子さんたちが、むしろここをきっかけにしてプラスに転じていけるような方策をどんどんアイデアとして出していけるといいなというふうに思っております。それが1点目です。

2点目の心配は、このG I G Aスクール構想が、今、学校の先生方も本当に苦勞されて、これをどう進めようか考えていらっしゃると思うのですが、この地域社会のほうを見たとき、川崎市がこれまで推進してこられた地域教育会議であるとか、地域の寺子屋事業であるとか、そういうものを支えている方々は、どちらかという御年配の方々が多くて、あまりオンラインに適應しにくい方々が多いのではないかなと思うのですね。そうやってきたとき、G I G Aスクールが進んでいくと、何かこう、地域が置いていかれてしまうような、本来は地域が支えていって、地域学校協働活動が高まっていくべきところが、G I G Aスクールを学校が本当に推進していくと、その足元の地域社会が見えなくなってしまうということが起こるとすれば、とてももったいないなと思うのですね。

ただ、これも、ピンチをチャンスにと考えると、これまで中高年中心だったそういう地域社会として学校を支える仕組みの中に、先ほど市長がおっしゃっていたような高校生とか、また大学生も。大学生って小学生が大好きなんです。ですから、お互い好き合っているという意味で、このG I G Aスクールと地域が絡まる場所に、高校生と大学生を積極的に呼び込んで、この人たちは本当にオンラインにはものすごく適應しやすい人なので、自分たちが役に立てると思えば、前向きにどんどん来ると思いますので、そうすれば、むしろ、地域教育会議とか寺子屋事業がさらに再活性化していったら、川崎が今推進している地域教育ネットワークの中に若者がどんどん入ってきて、G I G Aスクールと関係を持ちながら、地域全体でICT教育を推進していくというようなことも可能になるのではないかなと思うのです。

併せて、NPOであるとか、地域の企業であるとか、そういうところもむしろ、このオンライン化の中で、学校に関係を持ちやすくなってくると思うのです。ちょうど石井委員が先ほど言われたJ I C Aの関係な

んかも含めていくと、ローカルからグローバルまで含めて、社会全体で学校を支えていくような、また、市役所で言えば全庁的に支えていくような、そういうことを、GIGAスクールをきっかけにして展開できればいいなと思います。それが2点目です。

3点目は、ちょっと、実は子どもたちの目が心配なのです。視力低下といいますか、データのにも低下しているというのは出ています。子どもたちがゲームで遊ぶ時間は非常に長いというようなデータも出ています。こういう中で、学校ではタブレットで学習し、自宅でもやはり画面を見ながら学習が増えるとなると、子どもたちの生活の中でトータルで画面を見ている時間がものすごく長くなっていきやしないか。これがとっても心配なのです。

ただ、これはできるかどうか分かりませんが、ゲーム会社であるとか、映画会社であるとか、そういう何か、子どもたちのそういう遊びのデジタル的な遊びを提供するような会社と連携しながら、ゲーム感覚で宿題ができるような、そういう学習プログラムをうまく産業界との連携でつくっていったら、子どもたちが今までただゲームで遊んでいた時間を、ゲーム感覚でオンライン学習ができるというふうにして持っていけば、トータルな画面を見ている時間がそれほど多くなく、しかも子どもたちは楽しく学んでいけるということがあると思いますので、むしろこの機会に、そういう何かゲームみたいなものを積極的に学習と絡めていくような方策を考えていくと、GIGAスクールの川崎型の面白いものができてくるのではないかなというような気がしますので、少し考えてみていいかなと思いました。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。

高橋委員。

高橋委員 先ほど石井委員が触れられた、世界とつながるというお話は、私も本当にICTに期待しているところで、学習状況調査のアンケートを見ると、少し、海外への関心というか、外への気持ちというのが、若干低い傾向が、中学生なんかあるので、このICT、GIGAスクールを機に、学校でもいろんな、世界とのつながりを持ってもらえるといいのかなというふうにとっても期待をしております。

資料のスライドですと、14、15、16と今後必要となる新たな視点とありますけれど、この、まず短期的な視点というところと言うと、まだこれから始まるものなので、こういう大きなシステムって、やりながらたくさんの課題がどんどん出てくると思うので、入れたら終わりというよりも、これからが本番というか、恐らく、人的なサポートですとか、全然予想しなかったような事態とかが起きることも想定されますので、その辺りのサポートをぜひ市長も含め、教育委員会だけでなく、市のほうでもサポートいただければなというふうに思っております。

中期的な視点と長期的な視点というところで、やっぱりデジタルということで、データを活用していこうというお話が出ていると思うのですが、ずっと学習状況調査、川崎市のほうでも長くいただいて、たくさんのデータをためていただいて、いろいろ毎年分析いただいているのですが、やっぱりこういうビッグデータというお話になってきますと、とても量も多いし、非常にいろんなことが取れるようになるので、多分、いろんな要因が複雑に絡み合うような話がたくさん出てくると思うのですね。

だから、ただテストの点がいいとか、悪いという意味ではなくて、もっと広く深い分析ということになってきますと、なかなか学校の現場でやるということは難しくなってくるのかなと思うので、大学なんかの研究機関と連携して、ちょっと大規模な研究調査みたいなものを川崎が先陣を切ってやっていくというのも非常に重要なのではないかなというふうには思っているので、それもお金がかかる話だとは思っているので、ぜひ検討いただければなというふうに思っております。

それで、ICTが、ツールが学校に入るので、私一番期待しているのは、子どもたちの選択肢が増えるということと、多様な学習の姿が許容されるようになるということだと思っています。

やっぱり、学校って、まだ均一というか、みんなと同じことをしましょうというところがまだまだ強いところがあると感じています。なので、先生方は最初は大変になると思うのですがけれども、例えば、ノートで勉強する子もいれば、タブレットで勉強する子もいれば、タブレットに指で書いている子もいれば、写真を撮る子もいれちゃって。例えば、先生の話聞いてメモを取るにしても、いろんな方法が増えていく。そういう現場になっていくのかなと思っていて、そうすることで、やっぱり子どもたちの中にも世界って多様なんだ、いろんな子がいるんだという多様性が育まれると思いますし、本当に可能性がいろいろ広がってくると思いますので、現場の先生は大変になるなという気持ちはあるのですが、その多様性というところを大事に、だから、ICTだからって、全部ICTというわけではなくて、今までの勉強スタイルが合っている子ももちろんいるはずなので、いろんな方法で学べるようになるというところをとっても期待しています。

福田市長 ありがとうございます。

岩切委員。

岩切委員 先ほど、田中委員のほうからもありましたけれども、目の心配というのは、私もこのICTの話があったときに真っ先に思ったことで、もともと私もパソコンの販売の、というか、商品企画をやっていたということもあって、そのブルーライトとかそういったことに、ものすごくちょっと心配があります。視力低下であるとか、眼精疲労とか、あるいはドライアイとか、そういったことも、子どもに起きてくるような時代になってくるのだなということも思っていますので、ぜひそういった健康面のところの管理もお願いしたいな、なんてことを思っています。

いろんな、このアカウントをつくるなんていう話があったところで、ちょっとした懸念を思い出したのですが、以前、会社の中でアカウントをつくると言ったときに、日本人を想定して20文字を用意していたのです。20文字を用意していたのですが、海外の方が来られると、実は、タイ人とかすごく名前が長いので、収まり切らなくなるのですね。そういった子どもたちのために、川崎の場合、28か国もいるということもありますので、ぜひ全ての子どもたちが自分の名前をきちっと書けるような、そういった枠組みというか、そういったフレームワークをちょっと用意して、一人ひとりの人格というのを大切にしていきたいな、なんていうことをちょっと思っていました。

先ほど、高橋委員のほうからも話がありましたけれども、すごいデータになるのですね、これは。言ってみれば、114校の小学校、そして52校の中学校、そこが、全員が皆さんアカウントを持って、しかも先生方もアカウントを持つとなると、川崎市だけで11万人ぐらいのこの大きい巨大ネットワークが構築されることになります。しかも、小学校からそのまま中学に上がりますと、それが段階的に追跡調査ができるような、そういった状況にもなるわけで、これは本当にすばらしい、使いようによってはすばらしいデータです。ただ、セキュリティーに気をつけるということがとっても大事で、セキュリティーを大事にしながら、それをどうやって活用していくかというのは、ぜひプロの方たちを入れて、先進的に、川崎でいい事例を作っていっていただきたいな、なんていうことを思っています。

今回のICTの導入に関しては、Googleさんが協力してくださるという話もありますけれども、せっかくそういった大企業がついているのであれば、そういったいい事例を、ぜひ川崎から発信できたらすごくうれしいなということも思っています。

このGIGAスクール構想に関しては、文科省がいろいろ指導されているというのは分かっているのですが、ただ、文科省も今回が初めての経験なわけで、ではどういうふうにして全ての公立の小中学校を知ってこうということが、まだ見えていないんじゃないかなということもちょっと思ったりもします。

そんな中でやはり、いろんな可能性があるというところをぜひ感じて、取り組んでいってほしいなというふうに思っています、やはり一人ひとり、誰をも取り残さない、そういった教育というのをせっかく進めてきて、自主・自立、共生・協働ということをやってきたわけですから、その精神を本当に十二分に発揮できるような、そういったICTを、という導入にさせていただきたいなと思っています。

今までの授業をICTで置き換えるのではなく、発想を転換して、ICTを導入して、新しい未来の教育の姿をぜひ実現していただきたいなと。

もしかしたら、そこには、教室という概念がないかもしれないし、あるいは学年の壁というのがなくなるのかもしれないし、勉強と遊びの壁というのがなくなるのかもしれないんです。

これはもう10年以上前になるのですが、1人1台のパソコンを導入したオーストラリアの学校があったのですけれど、女子高だったのですが、その学校の生徒たちは、授業と言っても、別に机に座ったりはしないんです。床のところに寝そべっていたり、あるいは廊下のところにもたれて座り込んでいたりということで、当時はまだWi-Fiがなかったので、ネットワークつなげるときには何かワイアードになるのですが、そこで世界とつながって、いろんな英語圏であれば何でも検索できるというような、そんなことを実現していました。

ぜひ、世界につながるということを、先ほどおっしゃっていましたが、やはり世界にもっともっと目が向けるような、やっぱり世界に、英語が分かればもっともって世界が広がるんだというようなことを、子どもたちが体感するような、何かそんな教育につながっていくのではないかなと、ちょっと期待を込めています。

福田市長 ありがとうございます。

岡田委員。

岡田委員 今の岩切委員の御発言にも大賛成でございまして、ぜひこれを促進して行ってほしい。

その意味でも、まず最初に、私はどうしても伝えなかったのは、市長さんに対するお礼なんですね。私が教育委員になるときに、学校給食に関して、これ、学校給食、世界でトップですから、日本の学校給食は。それを中学校等に導入しているというのと同じように、このGIGAスクール構想を入れていくにあたっての市長さんの決断とか実行力というのを、私は本当に感謝を申し上げたいというふうに思います。

これからの川崎の10年の礎をここでつくられて、これをどう運営していくかというのが、これからの戦略だと思うので、その意味で先ほど岩切委員がおっしゃったようなものはとても大切なことで、共通認識、私たちが持って進めていくべきだというふうに思うのですね。

これ川崎市教育委員会が作りました教職員向けの「はじめよう かわさきGIGAスクール構想 ～ステップ0・1～」というのがあって、この最初の、川崎の教育の充実に向けてという教育長のこの文章はとてもすばらしいというふうに私、思います。こういう、全体が見えていないと先に進まないし、これも、私すごいなと思いました。教育委員会の皆様方がつくってくださいました、このGIGAスクール構想のリーフレットとかパンフレット。ここに示されている、先ほど、岩切委員がおっしゃった、あるいは私が言ったその、つながるということをキーワードにしているんですね。クラウド・バイ・デフォルトというような言葉と、自主・自立、共生・協働という、このかわさき教育プランをどう生かすのかという視点をしっかり持って書いていますので、これ、とても分かりやすくいいなというふうに思います。

そんな意味で、例えばですけど、子育てするなら川崎だよねと言わせたい。言わせたいというか、言っていらっしゃる方も今いらっしゃいますけど、それをさらに増やしていきたいなというふうに思っています。その意味で、先ほど私、ガバナンスと言ったのですが、ガバナンスと同時に、今度はさらにプラスしてアカウントビリティですね。どう説明責任をしていくかということがすごく大事だというふうに思います。

その意味で、教育長も過去の御発言の中で既にあったのですが、かわさき教育プランの中にこのG I G Aスクール構想をどういうふうに入れていくか。あるいはそこに、どういうふうビジョンを示していくのかということ、それから、現在は総合教育センターでしたすかね、あの人員を増やして、担当をして、決めていらっしゃるんですけど、それをさらにステップ2、3と進めていくとき、それでいいのかどうか。もっと別の形はあるのかどうかとかというのも工夫していく必要があるのではないかなというふうに思います。

かわさきG I G Aスクール構想、先ほど岩切委員がおっしゃったように、新しいものをつくるのですが、見失ってはいけないのは、川崎の教育のよさを絶対に失わないということ。これを、伸長させ、さらに伸ばしていくことだというふうに思いますので、キャリア生き方・在り方教育が伸展していく、それに寄与するためのG I G Aスクール構想でなければならないし、そこで出てくる新たな人間関係ということを考えたとき、「かわさき共生*教育プログラム」がさらに発展していくものにつながるG I G Aスクール構想であってほしいなというふうに思っております。

ここで一つ大事なのが、教員のICTスキルによって、差ができてしまうのではないかと懸念なのです。先ほどの御説明の中に、1,000人ほどが既に研修を終えていらっしゃるということですが、6,000人を超える教職員の方々がいらっしゃいますので、ぜひ悉皆研修のようなことを考えていただいて、1回で終わらないで、繰り返し繰り返しやっていくことによって、スキルアップをすることによって、川崎が狙っているものが確実にいくようにしてほしいなというふうに。

なので、わくわくする研修というのですかね。仕方なく来るという研修ではなくて、この研修に行くと、「こういうのが目に見えてきた」とか、「こういう方法があるんだ」とかという、そういうわくわくする研修をさらに進めていっていただきたいなというふうに思います。

それは、次のG I G Aスクール構想を踏まえた教員採用をどうするかということにもつながると思うのです。既に、教育長お書きになっていらっしゃいますけれども、その意味で、アドミッション・ポリシーとして、つまり、川崎市の教員を採用に当たって、どういう教員を求めているのかという、そのアドミッション・ポリシーの中に、どんなスキルを既に持っていることを求めるのかというような、そういうものもこれから示されていくのではないかとこのふうには思いますけれども、教員採用の在り方というのを、G I G Aスクールの踏まえながらも、さらに進めていっていただきたいなというふうに思います。

そして、最後になりますけれども、確実にやってくるであろう直下型地震、それから、東南海沖地震とか、南海沖地震を踏まえたときには、防災教育にどういうふうG I G Aスクール構想が活かされるのか。または、その予防的なものとして、どう生かしていけるのかというのが、あるのではないかなというふうに思います。

そういった意味では、前々回の時とかに、私、申し上げたと思うのですが、時を得て、人を得て、内なる力と外なる力が合わさらなければ改革って起こらないというふうに、私の恩師の國分康孝先生から教えていただいているのですが、その意味で、このG I G Aスクール構想が、まさに時を得て、人を得て、内なる力と外なる力、つまり地域住民の方々、保護者の方々と学校現場とが一体になって進めていかなければいけない。

その意味で、以前もちょっと申し上げたのですが、P I S Aが狙っている、学校教育とか教育の在り方に、さらに、国際バカロレアの視点も入れていく必要があるのではないかと。そのために、各都道府県も既に入れているところがあるのですけれども、国際バカロレアの中での教育の在り方というの、参考になるのではないかと。

それは、先ほど岩切委員がおっしゃったような、教室がなかったりとか、学年がなかったりとか、ディスカッションが中心で進んでいくことであつたりとか、そこは全て英語であるはずなので、そういったことも踏まえながら、先ほど申し上げた、子育てするなら川崎市というか、何か、それをさらに進めていくものにしていきたいなというか、しなければならないのではないかなというふうに思っております。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

小田嶋教育長 皆さん、おっしゃっていただいていること、本当にそのとおりだなと思いながら、受け止めておりました。皆さん、中長期的な視点での御発言が多かったかなと思います。

先ほど、岩切委員が発想の転換ということでおっしゃっていただいたこと、そして今、岡田委員が紹介していただきましたのは、この手引きの中で私も書いていることなのですが、今までの学校観、指導観から一度大きく離れて、新しい発想、考え方を積極的に取り入れながら、学校教育そのものを見詰め直してみることも必要だと考えていると。まさにそういった視点を持って、このGIGAスクールに取り組んでいく必要があるなというふうに思っております。

今皆さん、中長期的な視点からのお話だったと思うので、私、ちょっと短期的な部分で、現実的な部分で、着実に準備を進めているわけですが、いろいろなところに差があるのも事実でございます。当然、教員のスキルもありますし、管理職の意識、学校体制、そしてこれを推進していく推進教師としてGIGAスクールリーダー、GSLと呼んでいます。GSLにも、もちろんみんな一生懸命やっていますが、差がありますし、あと、端末配備がまだこれから入るところもまだあるのかな。そうですね。まだこれからということもあるし、早くに入ったところもある。その配備の状況によっても、学校の意識や準備状況に差があります。

それで、この、先ほど御紹介があったハンドブックで、まず0というところから始めて、1、2、3とステップアップ、3年間かけてやることを示して、かなりハードルを下げた設定にしています。どんどんいけるところはいいのですが、皆さんが苦手意識を持たずに全員で確実に取り組めるようにということで、徹底してもらっていますので、全体の底上げをしていくことが重要だなと考えています。

その中心になるのがGSLということで、大変積極的で、先ほどのスライドでも紹介してもらいました、皆さんの情報交換の場として、GIGA端末のクラウドルームの場というのを、サイトみたいな形で、皆さんが情報交換しております。私も入りまして、ちょっと私もメッセージを発信したりながら、皆さんのやり取りを見ているのですが、非常に熱心で、自分たちが開発したいような資料だとか、やってみたことだとかをどんどん出し合っていて、それを参考にしたり、質問したりという場があって、非常に勇気づけられるというか、ほっとするものがあります。

ただ、そのGSLの中にも差があります。例えば、先ほど言ったように、ちょっと学校へ行って聞いてみたところ、ある学校のGSLは技術科の専門的な先生ではあるのですが、教務主任はというと、教務主任、この3月、4月、めちゃくちゃ忙しい中で、まだその学校は端末が入るのがまだこれからだということで、先生たちの意識はまだ高くなっていないというようなことを聞きました。

そういった差もいろいろあるわけですが、先ほど言いましたように、ステップ1、2、3と確実にやっていくように取り組んでいく中で、何のためにこれを使うのかという、あくまでも手段であるわけですが、道具であるわけですが、それで、やっぱり目指すべき学習の姿というのを、教員が、子どももなのですが、よりはっきりと自覚して、何のためにこれを使うのか、どういう学習をして、どういう力を身につけるためなのかということを、GIGAがなくてもそれは当然必要なことなのですが、今まで以上にそういった意識を高めていく。

そのために、やっぱり今回の新しい学習指導要領というのは、今までになく、本当に切実な10年後の問題として、課題が示されているというのは、私自身も感じています。学習指導要領が目指しているものもしっかりと認識して、変わるべきもの、変えなくてはいけないことということもしっかりと教員が、学校が自覚していく。そういう中で、先ほど、指導観、学校観から離れて見るということも必要になってくるのかな

と思っています。

その中で、これ、学校だけではなくて、やはり、保護者や地域も、今教育がそうやって大きく変わっていきんだということをしっかり啓発していくということで、教育だよりかわさき等でGIGAスクールのことを紹介していつていますが、今後4月以降、各学校で教育家庭説明会、学校説明会みたいなものを必ずやっていく中で、あるいは学校教育推進会議ですとか、担任は学級懇談会みたいなものがあれば、その中で、これを使って何を指すのかということの共通認識をしっかり、説明できるように意識を高めていかななくてはいけないなど。

それは、短期的な、すぐに取り組まなくてはいけない課題として、考えているところです。

いろいろ本当に課題があるのですが、ものすごく大きな教育、よりよく変えていくチャンスになると思いますので、しっかり取り組んでいきたいと思っております。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

最後、何か付け足したいようなお話がありましたら、この際、いかがでしょう。

どうぞ。

田中委員 2点ほど簡単にですが、1点目は、先ほど私、議題の1で、子どもたちが各家庭からマスクを外してテレビ会議を用いてクラス単位で交流するというような話をしましたけど、一方で、議題の2で、家庭間の差によって格差が生じるという、ちょっとこれ、二つ合わせると矛盾した話なので、各家庭で子どもたちが参加するなんていうことを徹底させようとする、やはりまた、この家庭によっては非常に難しいという状況が出てくる可能性がある、マスクを外して素顔でクラスの中でつながらんことを考えるとしたら、まずは、教室じゃない、どこか個室を一つ用意して、そこで順番に子どもが入って行って、一人ひとりマスクを外して、何かプレゼンテーションをするとか、そんな形でお互いの素顔を理解し合うというぐらいかなというふうに思いました。ちょっと訂正をいたします。

もう1点目は、先ほど、全庁的、そして社会全体でGIGAスクールを支えるようなことを考えるといいという話をしましたけれども、まさにこの場が総合教育会議なので、教育問題を教育委員会だけではなくて、市長部局も合わせ、全庁的にどう取り組むかということを考える非常にいい場であるように思うのですね。ですから、そういう意味で、このGIGAスクールを川崎市の企業であるとか、NPOであるとか、コミュニティであるとか、それに関わる所管の各部局が、やっぱりこれ、全体で関わっていけるようなことをぜひ市長に考えていただけるとありがたいと思います。

GIGAスクールを通して、各部局がそれを支えていくようなことを考えるとか、あるいはそれを通して、地域社会が経済的に、コミュニティ的に発展するんだとか、その辺の相乗効果を狙うようなことが考えられるとありがたいなと思いました。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

岡田委員 教育長の先ほどのお話を聞いていて、私、川崎の駅から教育委員会会議で来る時に、歩道のところにモニターがございまして、あそこにGIGAスクールのことばんと打ち出されているのですね。ああいう示し方というのはすごくいいなというふうに思いましたですね。なので、教育長、おっしゃったように、もっと宣伝して、もっと皆様、市民からたくさんの御意見をいただいて進めていくのがいいのではないかなというふうに思っていました。

それで、もう一つ、先ほど私、言い忘れたことがあって、内閣府がS I Pという、戦略的イノベーション創造プログラムをやっているということなのですね。あれの、何か川崎版の教育版ができないかなというふうに考えていて、今後10年のことを考えたときに、令和の日本型学校教育というのは、国が示しましたので、そこで示されている個別最適化のためのデータベースをどう構築して、先ほど岩切委員がおっしゃったように、A I分析を用いてどうするかということ踏まえていったとき、何か、その戦略的イノベーション創造プログラムに類するような、それをヒントにするようなものできないかなというふうに思いました。

それで、私は、実は、教科担任制とG I G Aスクールはマッチするのではないかと考えています。これは、これから示されていくことなのですから、同じように、義務教育学校とか、中高一貫校がとてG I G Aスクールには合っているのではないかとこの研究とか、これをどうするかというのを予算をつけていただいて、さらに工夫していく。ステージ0、1、2、3になった段階ぐらいでそこがさらに促進していくためにどうするかという、そういう発想もあっていいのではないかなというふうに思っています。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

大分時間が過ぎましたので、少し私なりに、皆様の御意見を聞かせていただいて感じていることというのをお話ししたいと思いますが、この間も教育長などとともに、G I G Aスクールについての有識者と言われる人たちからも少しヒアリングをさせていただいている中で、非常に印象的だったのは、日本の教員というのは、ものすごくいろんなことをやっている。それは、ティーチングも、チュータリングも、コーチングも、ファシリテーションも、みんな、役割を、みんな一人の教員が担っていて、ということなのですよ。

ちょっと類を見ないほど、すごくカバーしている範囲が広くてというふうな話なのですから、このI C Tを使ったG I G Aスクール構想で、私はそのいい面、これを使ったらこういうところがすごく、うまく使うといいよねというところと、やはりG I G Aというか、デジタルでは不得手な部分というのがどうしてもある。そこをしっかりと本当に深く見極めるということが大事かなというふうに思っております。

先ほど、石井委員や高橋委員、ほかの方、岩切委員もおっしゃいましたが、世界につながるという、こんなに世界と簡単につながる環境というのできるというのは、今まで想像もしていなかったような世界ですし、スタディ・ログをしっかりと取れるというのは、これはものすごく大きいことだなと。

そして、皆様から言われているように、誰一人取り残さない、公正で、個別最適化された学びというのをしっかりと享受、提供していく、享受できる環境というふうなのは、ここをしっかりと深い議論をしていくと、おのずと、何をこのG I G Aでもってやるべきで、アナログであったり、リアルであったりといったところはどこが強いのか、あるいはやらなければならないのかということ鮮明にしていくことができるのではないかなというふうに思っています。

そのことをまだ、まだまだ今やり始めて、緒に就いたばかりなので、そこをしっかりと見極めて、川崎の教育目標の中にねじ込んでいくというか、新しいものに変化させていくということがすごく大事だろうなというふうに思っております。

一つ、やはり、岩切委員や田中委員もおっしゃっていましたが、高橋委員か。視力の低下の部分は、ちょっと本当に、これ、心配な部分というのがある。目が伸びちゃうというか、そういう傾向も見られているというふうなのをニュースで僕も見ただけなんですけど、そういったところもやはり、保健指導というか、学校教育の中で少し、この時間は、外を、遠くを見ましようとか、何かそういうふうなことというのを習慣づけていくということも必要なかなと、素人ながら思うのですが、その辺りは少し研究していただきたいと、専門家の方の意見も聞きながらやっていただきたいというふうに思っています。

一昨日、土曜日の日は、閉校式といって、Stanford e-Kawasaki というプログラムをやりまして、これ、川崎高校とそれから橘高校、二つの高校から10名ずつ参加していただいて、まさに半年間にわたってスタンフォードとZoomで授業を受けて、ディスカッションをし、プレゼンし、というふうなのを繰り返してやってきて、半年間やってきて、その修了式をやったのですけれども、6か月前に会った時と終わった時の生徒の姿って、非常に成長が見られたなというふうに、本当に6か月間のこの短期でこんなにも変わるかなという、自信を持ったということです。

何がやっぱりよかったかというのは、それはずっと英語でやり続けるんですよ。英語でしゃべるとということというのは、言語はツールだということなのですけれども、その英語というよりも、英語だけだったらそれは英会話教室でいいのですよね。なののですけれども、そこで学んだのは、学びのテーマは、多様性と、それからアントレプレナーシップだったのですよね。スタンフォードということも、背景もあって、そのテーマを二つに絞ってやっているわけなのですけれども、そのことを子どもたちは学んで、非常に、英語でということもチャレンジングだったけど、その内容が非常にチャレンジングで、すごくいい機会をもらったということで、皆さん、すごいコメントを一人ひとりしていました。それも英語で。すばらしかったですね。

本当に大丈夫かなと思ったのですけれども、全員がしっかりとした成績を収めて修了したので、そこは今までこういうZoomでもって6か月間こういうことになるというふうなのは、もともとこういうZoomでやろうというか、E-learningの世界なののですけれども、ここまでだんだん進化してきているなというのをすごく感じさせてもらいました。

そういう意味では、こういった可能性を、こういうツールはできる可能性を秘めていると。だから、どういふに私たちがうまくこのツールを使いこなすかということが、生徒にとっても、教員にとっても、非常に、繰り返しになりますけど、チャレンジングな取組だと思うので、そこは、サポートするところというのは、しっかりサポートしていかないといけないなということを改めて感じさせていただいているところです。

すみません。長くなりましたけれども、今日、様々、鋭い、すてきな視点をいただいたというふうに思いますので、今後のもろもろの施策に生かしてまいりたいと思っております。

よろしいでしょうか。

(なし)

議題は以上となりますが、これで協議・調整事項は、終了とさせていただきます。
後は事務局に戻します。お疲れさまでした。

宮崎都市政策部長 ありがとうございます。

これもちまして、令和2年度第2回川崎総合教育会議を閉会させていただきます。
ありがとうございました。

16時40分 閉会